

令和二年度 文学部 日本・中国文学科 推薦入試 小論文問題②

〔注意〕

- 1 机上に受験票を提示しておくこと。
- 2 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけない。
- 3 解答は必ず別紙の解答用紙の指定された箇所記入すること。
- 4 解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入すること。
- 5 この冊子の問題は四頁からなっている。
- 6 この冊子のうち、落丁・乱丁及び印刷不鮮明な箇所があれば、手をあげて申し出ること。
- 7 句読点やカッコ、数字はそれぞれ一字として記入する。
- 8 満点は一〇〇点である。ただし、二倍し、二〇〇点満点に換算する。
- 9 問題冊子と下書き用紙は、持ち帰ること。
- 10 試験開始後六〇分を経過しないと退室できない。また、試験終了前一〇分間は退室できない。退室するときは、手を挙げて申し出た上で、試験監督者の指示に従うこと。なお、解答用紙は机上に置き、その上に試験監督者が配付する用紙を重ね、問題冊子は持ち帰ること。

次の文章は、ある貴族の男性が、配偶者とすべき女性の資質を技芸になぞらえた発言である。これを読んで、解答用紙の枠内にその趣旨を要約し、時代環境や社会の制度といった条件を考慮したうえで、語り手の主張に対する自分の意見を記せ。(50点)

よろづのことによそへておほせ。木の道の工たくみの、よろづの物を心にまかせて作りいだすも、臨時のもてあそび物の、その物と、あともさだまらぬは、そばつきさればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつつ、さまをかへて、今めかしきに移りて、をかしきもあり。大事として、まことにうるはしき人の調度てうどの飾りとするさだまれるやうある物を、難なくしいづることなむ、なほまことのもの上手は、さまことに見えわかれはべる。

また絵所ゑどころに上手多かれど、墨すみがきに選ばれて、次々にさらにおとりまさるけぢめ、ふとしも見えわかれず。かかれど、人の見及ばぬ蓬萊ほうらいの山、荒海のいかれる魚の姿、唐国からくにのはげしきけだもののかたち、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろおどろしく作りたるものは、心にまかせて、ひとときは目おどろかして、実じしには似ざらめど、さてありぬべし。世の常の山のたたまひ、水の流れ、目に近き人の家居いえありさま、げにと見え、なつかしくやはらいだるかたなどを、静かにかきませて、すくよかならぬ山のけしき、木深く、世離れてたたみなし、け近き籬まがきのうちをば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいといきほひことに、わるものは及ばぬ所多かめる。

手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしこの、点長てんながにはしり書き、そこはかとなくけしきばめるは、うち見るに、かどかどしくけしきだちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今ひとたび取りならべて見れば、なほ実になむよりける。はかなきことだにかくこそはべれ。まして人の心の、時にあたりてけしきばめらむ、見る目の情けをば、え頼むまじく思うたまへてはべる。

(注) ○木の道の工……家具や道具を作る指物師。 ○臨時のもてあそび物……その場限りの趣味的な道具。 ○あともさだまらぬ……作り方が決まっていけないもの。 ○そばつきさればみたる……外観が洒落て気がきいているもの。 ○大事として……いい加減にできない、格式の高い仕事として。 ○さだまれるやう……決まった形式。 ○絵所……宮中の絵画・装飾を司る役所。 ○墨がき……彩色絵において、墨で輪郭や構図を描き、色彩の指示をする師匠格の絵師。 ○蓬萊の山……古代中国で空想された神仙の住む山。 ○心にまかせて……想像力のおもむくままに。 ○実……実際、実質、実物。 ○世の常の山のたたずまひ……世間のありふれた山のすがた。 ○すくよかならぬ山のけしき……遠景のなだらかな山々の様子。 ○世離れてたたみなし……俗世を離れたように幾重にも描き。 ○け近き籬のうち……近景である庭先の前栽。 ○心しらひおきて……心配りや描法。 ○わるもの……技能の未熟な絵師。 ○手……字、筆跡。 ○深きこと……きちんとした素養。 ○点長にはしり書き……点を長く引いて筆を走らせて続け書きすること。 ○けしきばめる……気取って書いてあるもの。 ○かどかどしくけしきだちたれど……才氣ばしっていて目立った感じがするけれど。 ○まことの筋……本格的な筆法。 ○うはべの筆……ちよつと見の筆づかい。 ○はかなきこと……ちよつとした才芸。 ○人の心……相手の女の心。 ○見る目の情け……外見だけの風情。 ○頼む……信頼してあてにする。

次の文は、柳宗元が政治改革を志しながら、保守派との政治闘争に敗れ、南方に位置する永州に追われた時に書いたものである。解答用紙の枠内で、内容を要約し、この話に託して作者が何を言おうとしているのかを述べ、それに対する自分の意見を記せ。(50点)

永有某氏者。畏日、拘忌^{スルコト}異甚。以為^{ヘラク}、己生^{マルル}歲直子^ハ、鼠子^ハ神也^ト。因^{リテ}愛^{シテ}鼠、不^レ畜^{ヤレハ}猫犬、禁^{ジテ}僮^{ドウニ}勿^{ラシム}擊^{ツコト}鼠。倉廩^{サウリン}庖厨^{ハウチウ}悉^ク以^テ恣^シ鼠^ニ不^レ問。由^{ツテ}是^ニ鼠相告^{ゲテ}皆来^リ某氏^ニ、飽食^{キテ}而無^シ禍。某氏^ノ室無^ク完器、櫛^ハ無^ク完衣、飲食^ニ大率^ハ鼠之余也。昼^ハ累累^{トシテ}与人兼行^{ネテ}、夜^ハ則^チ窃^{ヒソカニカヒリテ}鬻^{ハス}鬪暴^ヲ。其^ノ声万状、不可^レ以^テ寢^{イヌ}、終^ニ不^レ厭^{イトハ}。數^{ニシテ}歲^{ニシテ}某氏^ハ徙^{ウツシ}居^ヨ他州^ニ、後^ニ人^{リテ}来^ス居^ス。鼠^ハ為^ス態^ヲ如^シ故^ト。其^ノ人^ハ曰^ク、是陰類^ノ惡物也。盜暴^モ尤^モ甚^シ。且^ツ何^ヲ以^テ至^{レル}是^ニ乎^ト哉^ト。仮^リ五^ニ六^ニ猫^ヲ、闔^{トシ}門^ヲ撤^シ瓦^ヲ、灌^ギ穴^ニ、購^ヒ僮^ヲ、羅^ニ捕^シ之^ヲ、殺^ス鼠^ヲ如^シ丘^ノ。棄^{ツルニ}之^ヲ隱^ル處^ニ、臭^{キコト}數^{ニシテ}月^{ニシテ}乃^チ已^ム。嗚呼[、]彼^ハ以^テ其^ノ飽食^ニ無^キ禍^ヲ為^ス可^{シト}恒^{ナル}也^ト哉^ト。

(柳宗元「永某氏之鼠」による)

(注) ○永……地名。柳宗元が左遷された永州のこと。 ○畏日……年月日の吉凶を気にすること。 ○拘忌……こだわること。
○僮……召使い。 ○倉庖厨……米倉と台所。 ○櫛……衣掛け。 ○兼行……一緒に行動すること。 ○陰類悪物……
陰陽で言えば陰に属する悪い物。 ○仮……借りること。 ○羅捕……探し出して捕まえること。 ○隱処……人目につか
ないところ。